

第6回国際古代西アジア考古学会議に参加して

門脇 誠二

Notes on 6ICAANE in Rome

Seiji KADOWAKI

キーワード：古代西アジア、国際会議、最新調査報告、先史研究、前4～1千年紀のワークショップ

Key-words: ancient Near East, international congress, recent fieldwork, prehistoric research, workshops in the 4th-1st millennium B.C.

ICAANEは International Congress on the Archaeology of the Ancient Near Eastの略称で、古代西アジア考古学の国際会議である。その第6回目の大会が2008年5月5日から10日の6日間にわたってローマにおいて開催された(図1)。ICAANEと同様に、西アジア考古学に関連する国際学会として、American Schools of Oriental ResearchやBritish Association for Near Eastern Archaeologyなどがあげられるかもしれない。しかし、その中でもICAANEが最も大規模であり、西アジア各国からも多くの現地研究者が参加することが特徴だといえるだろう。今回の大会では、400にのぼる口頭発表と60ほどのポスターに加え、10以上の記念講演が行われた。

Sapienza Università di Roma

6th International Congress on the Archaeology
of the Ancient Near East
Rome, 5th-10th May 2008



Papers

図1 第6回ICAANEの発表要旨集

1998年に開催された第1回会議について西秋良宏会員が「日本西アジア考古学会通信第4号」で報告されているが、当時は発表とポスターを合わせて200本だったというから、本学会の規模はこの10年で2倍以上になったといえる。その一方、開催期間は従来どおり6日間である。その結果、幾つもの会場に分かれて発表が行われたため、会議への参加は選択的なものとならざるを得なかった。したがって、以下の報告では会議全体の概要や発表テーマ、ワークショップの内容についてお伝えするが、その詳細は筆者が実際に参加した部分に基づくことをご確認いただけたら幸いである。また、発表内容の詳細をご覧になりたい場合は、6ICAANEのホームページ(www.6icaane.it)において、プログラムと発表要旨それにポスター要旨がダウンロードできる。

大会の概要

ICAANEは1998年に、今回の開催地でもあるローマにおいて設立大会が開かれ、それ以降2年毎に順調に開催されてきた。国際会議(international congress)であるから、開催地に地域的な限定は本来ないはずであるが、過去5回の開催地は全て西ヨーロッパの主要都市である(第1回から順にローマ、コペンハーゲン、パリ、ベルリン、マドリッド)。おそらく、ICAANEを運営する国際科学委員会(the international scientific committee)が、西欧の研究者によって組織されていることが大きな理由と思われる。大会の運営上の都合のために、役員の所属する機関に開催地が偏るのだと思われる。一方、それは参加者にとって地理的な利便さをもたらす結果となっている。西アジアから地理的に近いヨーロッパを開催地にするすることで、現地の実験者の参加が促されていると思われるからである。冒頭でも触れたように、西アジア考古学に関する他の国際会議の



図2 第6回 ICAANE の会場となったローマ大学「サピエンツァ」の正門

参加者は欧米研究者が中心なのに対し、ICAANE には西アジアから多くの現地研究者が参加する。それならば、彼らが渡航しやすい場所で ICAANE を開催することには意義があると思われる。

今回会場となったローマ大学は、第1回大会が開かれた場所でもあり、2度目のホスト役を務めた。ローマ大学「サピエンツァ」のキャンパスは、ローマの中心街に位置しており、ダビンチ空港から市内に乗り入れる鉄道の終点、テルミニ駅からも近く便利な場所である。列柱を模したかのようにそびえ立つキャンパス正門が印象的であった(図2)。会場として、法学部と文哲学部属する3つの隣接する建物が使用され、それぞれの場で、記念講演会とワークショップ、そして次に述べる4つのテーマに基づく一般発表が催された。

4つの発表テーマ

大会のメインとなる一般発表は、以下の4つのテーマに沿って行われた。

- 1) 西アジア考古学の過去、現在と未来：考古遺産と考古学者のアイデンティティ (Near Eastern Archaeology in the Past, Present and Future. Archaeological Heritage and the Archaeologist's Identity)
- 2) 西アジア考古学における民族考古学的・学際的アプローチ、その結果と展望 (Ethnoarchaeological and Interdisciplinary Approach, Results and Perspectives in Near Eastern Archaeology)
- 3) 上位と下位：社会関係と社会地位の定義における視覚表現と工芸製作 (High versus Low: Visual Expression and Craft Production in the Definition of Social Relations and Status)
- 4) 発掘、踏査と保存：西アジアにおける考古調査の速報

(Excavations, Surveys and Restorations: Reports on Recent Field Archaeology in the Near East)

テーマ1は、研究活動の自覚的反省とその結果として新たな実践を旨論む極めて現代考古学的テーマであるが、これに含まれた発表はわずか15ほどであった。

その一方、最も発表数が多かったのが4つ目の調査速報であり、100ほどの報告が行われた。これだけの大規模学会では、特定のテーマに関する議論よりも調査速報が期待されていることを示しているのかもしれない。その内容であるが、ICAANE の設立当初から中心的であった前3～1千年紀の考古学に加えて、近年は先史時代に関わる発表数が増加してきている。実際、前回の第5回大会では、新石器時代の埋葬儀礼や南レヴァント地方の銅石器時代編年をテーマにしたワークショップが開かれたほどである。それぞれの題名は、「生者の家と死者の場 (Houses for the Living and a Place for the Dead)」と「文化、編年と銅石器：南レヴァントの先史時代後期における変遷 (Culture, Chronology and the Chalcolithic: Transitions in the late Prehistory of the Southern Levant)」である。後者のワークショップは、論文集として近々出版される予定である。

今回の会議でも新石器時代の発表は多く、日本西アジア考古学会からは常木晃会員と三宅裕会員が発表された。常木氏は北西シリア、テル・エル・ケルクにおける2007年の調査で発見された土器新石器時代の墓地について、その規模や埋葬法、年齢構成、副葬品などについて報告された。三宅氏は、南東トルコ、サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡における2004～2006年の調査によって発見された、当地最古級の土器について発表された。サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡に後続する時期の居住と考えられるハケミ・ウセ遺跡の調査報告についてH. テキン (Tekin) 氏による発表があり、居住地に伴う墓地の発見について述べられた。

他には、E. コックニュー (Coqueugniot) 氏によるシリア、ジャーデ・エル＝ムガラ (Dja'de el-Mughara) 遺跡の調査報告があった。10年以上継続する調査の成果がまとめられた後、本遺跡の最古期 (紀元前9千年紀前半) で発見された壁画の調査経過が述べられた。壁画の発見は、*Science* Vol. 314, no. 5798, p. 395ですすでに報告されていた。一方、今回の発表では、同じ建築物から同様な壁画がもう1つ発見された事実が報告された。円形部屋の内部に突出する壁に模様が描かれているが、その壁は円形部屋の円周を3等分する位置に配置されているという。これまで2つが発見されているが、残念ながらもう1つの壁画が存在すると予想される場所は発掘区域外に位置し、数メートルの堆積の下に埋もれている。しかしながら、この建物が

特殊であることに変わりはなく、それが「公共建造物」であった可能性が指摘された。

D. バイード (Baird) 氏は、トルコ、ボンジュクル・ホユック (Boncuklu Höyük) 遺跡における 2006 - 2007 年の調査について報告した。この遺跡は先土器新石器時代に居住され、チャタル・ホユック遺跡とプナルバシュ遺跡 (続旧石器) のあいだの時期 (14C 補正年代で前 8500 - 7500 年) の人々の生活に関する情報をもたらす点で重要である。遺跡はチャタル・ホユック遺跡の北 9 km に位置し、円形の住居と遺物廃棄場が発見された。チャタル・ホユックよりも小規模で粗雑な建造物ではあるが、住居内の場の利用の痕跡が、チャタル・ホユックで観察されたようなパターンを示すことが指摘された。

一方、南レヴァント地方に関してはカティフィアン (Qatifian) 文化の特徴について、Y. アバディ・レイス (Abadi-Reiss) 氏が I. ギリヤード (Gilead) 氏との共同研究を発表した。カティフィアンは、前 6 千年紀末から 5 千年紀はじめ (14C 補正年代) に年代付けられ、ガザ地区に位置するカティフ Y 3 (Qatif Y3) の物質文化に基づいて 20 年ほど前に定義された。この示準遺跡から出土した資料が発表者によって再分析された。主に打製石器と土器の技術形態学的特長を、南レヴァント地方の新石器文化 (Wadi Rabah や Lodian) と銅石器文化と比較した結果に基づき、カティフィアン文化の特徴が提示された。そして、それが新石器—銅石器の移行期に相当することが説明された。

遺跡踏査の報告も多かった。その 1 つの例が、T. ウィルキンソン (Wilkinson) 氏ら (エディンバラ大学とダーラム大学) によるユーフラテス川上流域の西岸、カルケミシュ南部の調査である。その概報は既に *Levant* 39 において公刊されている。彼らの踏査は「景観踏査 (landscape survey)」と呼ばれ、テルだけでなく、それ以外のタイプの遺跡の検出にも努める。つまり、開地遺跡や用水路、採石場などの痕跡も記録し、その分布に基づいて一定の地域における人間活動や社会を復元することを目指す。発表は E. ペルテンブルグ (Peltenburg) 氏によって行われ、調査地におけるセトルメントパターンの通時の変化とカルケミシュ市の発展の関連について論じられた。

2 つめの「民族考古学的・学際的アプローチ」というテーマでは、遺物や遺構、遺跡の分析に関する発表が多く行われた。日本からは松村公仁氏が森貴之氏と共同で、アナトリアにおける鉄器時代編年を再考する発表を行った。カマン・カレホユック遺跡における層序と 14C 年代を明晰に取り扱うために、それぞれハリス・マトリックス法とバヤーズ統計を用いた分析が行われた。

M. ルミエール (Le Mière) 氏は、セクル・アル・アヘイマル遺跡やアカルチャイ・テベ遺跡から出土した最古級の土器の形態や製作技術の特徴を述べ、土器片の化学成分に基づくクラスター分析の結果を説明した。今後の研究課題の 1 つとして考えられるのは、発表後の質問でも指摘されたが、最古の土器がどのようなコンテキストで用いられていたかを明らかにすることであろう。標本数の少なさが問題となるかもしれないが、今後の資料増加によって研究が具体的に進められるようになるかもしれない。

この他の学際的研究として、人骨に含まれる炭素と窒素の安定同位体分析による食性の復元に関する発表があった。D. バイード (Baird) 氏らのグループが、トルコの新石器時代の遺跡 (チャタル・ホユックとプナルバシュ) 出土の人骨を対象に行った。個人が実際に何をどのくらい食べたのかを示す直接的な証拠であるため、集落民全体としての生態だけでなく、食事内容について集落内やジェンダー間でどのような違いがあったのかについて示唆が得られる可能性がある。

イスラエルのテル・ドール (Tell Dor) では、中期青銅器時代からローマ期にかけての焼成活動の痕跡とその形成過程を明らかにするための学際的研究が行われている。F. ベルナ (Berna) 氏らの共同研究である。特に、金属器の製作場を突き止める証拠として、焼成の痕跡と銅残滓の堆積が一次的か、それとも二次的な再堆積なのかを区別するために、遺跡土壌を焼成実験し、粘土鉱物に変化する過程が研究された。また、土壤微細形態学や X 線回折、蛍光 X 線分析、植物珪酸体などの証拠を考慮することによって、明確な焼成施設が検出されない場合でも、焼成活動の痕跡を得ることができる可能性が指摘された。

一方、民族考古学に関わる発表は数少なかった。その例として、M. ロンキビスト (Lönnqvist) 氏はビシュリ地域における遊牧民の調査の概要を発表した。もう 1 つ、B. パーカー (Parker) 氏は、アナトリア南東部のケナン・テベ (後期銅石器から前期青銅器時代) において発見されたオープン機能やジェンダーとの関わりを説明するにあたり、現代使用されているパン焼き窯やその使用者 (女性) の事例をどの程度まで参考にできるかを論じた。

3 つめのテーマ「上位と下位：社会関係と社会地位の定義における視覚表現と工芸製作」として行われた発表では、土器や円筒印章、壁画に見られる図像表現に加え、土器や石器、骨角器、ビーズなど様々な工芸品の製作活動について報じられた。

例えば、S. キャンベル (Campbell) 氏は、トルコの土器新石器時代のドムズ・テベ遺跡におけるデス・ピット (Death pit) から出土した大型土器片に描かれた模様に関

して発表した。その土器片にはハラフ文化に特徴的な幾何学文様はない。代わりに、住居や鳥、樹木といった自然写実的な模様が描かれていた。その上、描かれた住居はトロスから想像されるような円形ではなく、2階建ての矩形であり、2階部分へは梯子あるいは階段が斜めに渡されている。キャンベル氏によると、この文様の類例は、サビアピヤド出土の土器片やアルパチャ出土のペンダントに求めることができるという。それゆえ、この自然写実的文様は一定地域の社会に共有され、ある意味を持つイメージであった可能性があるという。

同じくドムズ・テベ遺跡のデス・ピットから出土した4千点以上の土器片について、A. フレッチャー (Fletcher) 氏による発表があった。デス・ピットは集団墓であるが、その埋葬は共通祖先の崇拜に関わる儀礼が繰り返された結果と考えられている。この前提に立ち、ピットから出土した土器の破損と廃棄パターンを調べることによって、ピットに埋める土器片を当時の人々がどのように選択・分類したかを明らかにし、それに基づいて当時の儀礼や象徴システムに関して議論が試みられた。

筆者は、南レヴァント地方における土器新石器時代後半(14C補正年代で前6千年紀)の石器製作技術に関する発表を行った。この時期の石器製作は、剥片製作中心の便宜的インダストリーと一般に考えられている。しかし、北ヨルダン、ジクラブ溪谷に散在するワディ・ラバ期の農耕村落から出土した資料を用い、技術形態学分析と石器の接合を行った結果、鎌刃の製作に関連して石刃製作が発展する初期段階が認められることを指摘した。また、石器製作の屑(デビタージュ)の空間分布を調べることによって、石刃製作が基本的に世帯単位で行われ、その頻度や技術には世帯間で差がある可能性を論じた。

このほか、テル・ハムカルの後期銅器時代における黒曜石製石刃の大量生産について、L. ハリディ (Khalidi) 氏と S. クンタル (Kuntar) 氏が報じた。当該遺跡の南拡張区で発見された大量の黒曜石には、石刃製作の全工程から生じた屑が含まれる。さらに、その規模は当遺跡での消費規模を超えるという点や、黒曜石製ドリルを用いたビーズ製作が行われた証拠に基づき、交易活動の可能性が論じられた。

このように、本テーマの研究発表はモノのデザインや製作という比較的一般的な内容が多かった一方で、データの解釈を試みる程度や解釈の理論的枠組みは発表者ごとに大きく異なった。その結果、異なる発表間のあいだで関連が薄く、続けて発表を聞いた場合、散漫な印象が残った。学会の規模がこれだけ大きくなると、発表内容を事前に細かくチェックし、それに従って統一したセッションを設けることは難しいのかもしれない。

ワークショップ他

一般口頭発表のほか、以下の6つのワークショップが開かれた。

青銅器時代のハツォールにおける儀礼地区 (The Ceremonial Precinct of Bronze Age Hazor)

西アジアと東地中海における回転成形技術の発達パターン、前5～1千年紀 (Modes of Development of Wheel Fashioning Techniques in the Near East and Eastern Mediterranean 5th-1st Millennium BC)

地中海北東部における文化の衰退と流入：前4～1千年紀のギリキアとオロンテス溪谷北部からの地域的展望 (Cultural Ebb and Flow in the North-East Mediterranean: Regional Perspectives from Cilicia and the North Orontes Valley in the 4th-1st Millennium)

西アジアのステップ地帯の経営と組織：多様性、歴史性と変化 (Management and Organization of the Steppe Landscape in the Middle East: Variability, Historicity and Change)

北の展望：前3千年紀後半から前2千年紀初頭の北メソポタミアとアナトリア地域における社会経済の動態 (Looking North: the Socio-economic Dynamics of the Northern Mesopotamian and Anatolian Regions during the Late 3rd and Early 2nd Millennium BC)

アッシリア人とアラム人の交流 (Assyrian and Aramaean Interaction)

ワークショップはICAANEの発足当初から設けられていたわけではなく、学会の規模拡大に伴い出現したようである。少なくとも前回のマドリッド大会でも幾つか開かれ、新石器や銅器時代のテーマが掲げられたのは先述した。一方、今大会のワークショップが焦点とした時代は、青銅器時代から鉄器時代にかけて(前4～1千年紀)がほとんどであり、従来からICAANEで中心的な位置を占めてきた分野である。この時代の研究発表が従来以上に増加し、年代や地域、テーマをより絞った発表が集められたようである。本学会からは西山伸一会員が3つ目のワークショップで、アムーク平原の鉄器時代について発表された。

このような分科会は一般発表と異なり、専門分野の近い研究者が特定の研究課題に関して深い議論を行うことができるという利点がある。それは、発表者だけでなく聴衆にとっても多くの情報をもたらすし、新しいアイデアが生まれる場にもなると思われる。実際、それを契機に論文集が計画されたこともある。しかしその一方、今回の大会ではワークショップの開催が学会全体から孤立していたように感じられた。会場が別の建物に位置した上、プログラムにはワークショップの参加者名が羅列されるのみで、その

1つ1つの発表時間が掲載されていない。その結果、興味のある発表を選んで部分的にワークショップに出席することが難しかった。

この他の分科会として、イスラム期の考古学が独立したセッションとして設けられ、3日間にわたり約30の研究発表が行われた。この時代の発表も第1回 ICAANE では含まれていなかったようで、学会の規模拡大につれて新たに加わった分野である。また、ポスターセッションには約60の研究が参加した。本学会員からは、西秋良宏氏がシリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡における先土器新石器時代B期の層から出土した大型女性土偶について発表された。ポスター会場は、一般発表が行われた建物と同じだったので、発表の合間に適宜見学することができた。時代と地域別に掲示されたポスター発表は、自分の興味に合う研究を、効率よく選択的に見ることができ便利であった。ICAANE のように大規模化する学会の情報交換では、ポスター発表が効率的かもしれない。

大会の概評

以上、第6回 ICAANE で行われた研究発表やワークショップの概要について報告させていただいた。規模の肥大化と内容の多様化が本大会において特徴的であったが、それは発表の門戸を開放することによって多くの研究者に発表の場を与え、情報交換をうながす喜ばしい傾向であると思われる。発表される研究の時代と地域が広がっただけでなく、以前より多くの現地研究者が参加したようだ。トルコ、シリア、イスラエル、ヨルダンなど従来から参加している国に加え、今回目立ったのはイラン人考古学者による当地での踏査や発掘の報告である。また大会の最終日には、西アジア各国における考古学調査の近況報告が各国の古物局長によって行われた。残念ながら筆者はそれに出席できなかったが、予定されていた発表国はイラン、イラク、パレスチナ、イスラエル、ヨルダン、レバノン、シリア、そしてトルコである。また、学生の参加が増加したことも規模拡大の一因のようだ。要旨集には発表者の所属のみが記されているが、博士研究の経過発表も多々含まれていた。学生にとっても発表経験を得られる上に、現在進行中の研究に対する意見を得られる格好のチャンスである。

しかしその一方で、一般発表のセッションは全体として統一感に欠ける印象があった。テーマを掲げてはいるが論点が絞りきれず、発表のあいだに関連をみつけることは難しかった。複数の会場で発表が平行して行われる大規模の学会に共通することかもしれないが、聴衆は発表スケジュールをチェックして、興味のある発表に出席するために頻繁に会場のあいだを移動していた。そのため、1つのセッションに留まることはむしろ稀であるから、発表内容を無

理に統一する必要はないのかもしれない。しかしながら、関連した内容の発表を隣接することによって、研究者間の情報交換や議論はより活発に行われると思われる。今回、テーマ毎に議論が絞りきれなかった理由の1つとして考えられるのは、テーマの主旨が詳しく説明されなかったことである。特に最初3つのテーマについて、主催者がどのような議論の交換を期待しているかをより明確に示すことができたかもしれない。せめて、幾つか論点の選択肢を示すことによって、テーマ内での発表のまとまりをより明確にさせ、それに基づいて発表スケジュールを組むこともできたのではないだろうか。おそらくこの不満は、ワークショップの形をとることによって解消するのかもしれない。実際、今回行われた6つのワークショップで掲げられた研究課題は具体的で、掘り下げた議論が交わされたのだと思う。ただし、今回の大会においてワークショップが会議全体から孤立傾向にあったことを先に指摘した。発表のスケジュールを掲載することによって、ワークショップをより多くの参加者に開放することができるだろう。

それにしても、このように大規模の学会を組織・実行された運営委員会およびスタッフの方々には謝意を表したい。発表者の登録やプログラム作成など大会前の準備も大変であったろうが、大会中も会場の設営や発表スライドの準備、そして企画イベントの実行に多くのスタッフの方々が奔走しておられた。午前と午後に1回ずつの休憩時間には、飲み物と菓子のスタンドが用意され、研究者間の交流の場となった。以前より企画数は減ったかもしれないが、フォロ・ロマーノやパラティーノの丘などローマの著名遺跡へのエクスカージョンも実施された。そして、最終日の晩には閉会パーティが催された。

年々、規模が大きくなる ICAANE を開催する上での大きな問題は、場所の確保であろう。今回も、最大6つの会場で平行して発表が行われた。その内3つは、文哲学部の古典美術博物館の大教室で収容人数は100人以上と思われる。残りの3つは小さな教室あるいは博物館展示室の一角であり、20～30人ほどが座れる大きさである。キャンパス内には学生の姿を多く見かけたが、5月にこれだけの教室を確保することも簡単なことではなかったかもしれない。なお、運営委員会の仕事は大会後も会報の編集作業として続く。これまでに第1回と第4回大会の会報が出版されている。

次回、第7回の大会は2010年4月12～16日にロンドンで開催される予定で、ロンドン大学と大英博物館が共同で運営する。テーマとして予定されているのは1) 巨大都市と巨大遺跡 (Mega-cities and Mega-sites)、2) 文化遺産に関わる過去と現在の問題 (Ancient and Modern Issues in Cultural Heritage)、3) 建築、芸術と物質文化

における色と光 (Colour and Light in Architecture, Art, and Material Culture)、4) 消費と廃棄の考古学 (The Archaeology of Consumption and Disposal)、5) 景観、運搬、コミュニケーション (Landscape, Transport, and Communication) である。大会のホームページは www.7ICAANE.org として立ち上げられている。次回も、

今回と同様に数多くの参加者が集い、多様な内容の発表が行われることが予想される。運営委員会の方々のご足労を察するが、より多くの情報交換と研究者交流が生まれる場になることを期待している。末尾ではあるが、筆者の 6ICAANE への参加は日本学術振興会特別研究員奨励金の資金援助によることを記して謝意を表す。

門脇 誠二

日本学術振興会特別研究員

Seiji KADOWAKI

Postdoctoral Fellow, Japan Society for the Promotion of Science